

所長就任にあたって

北海道立アイヌ民族文化研究センター所長
谷本一之



昨年の11月から、当研究センターで仕事をすることになりました。これまでアイヌの民俗芸能の研究を中心に、北方諸民族の民俗芸能の比較研究を続けておりましたので、教育研究機関の管理者としての仕事に追われる生活を終え、さあ、これで本来の研究中心の生活に戻れるという思いと、また運営協議会の一員として当研究センターの活動についていろいろ考えてきたことを実現したいという抱負をもちながら、所長の職をお引き受けした次第です。

就任してから四ヶ月になりますが、あらためて当研究センターへの各方面からの期待がいかに強いものであるかを実感すると同時に、その期待にどれだけ応えることが出来るのか、責任の重さに自からたじろいでいるというところです。

これまでのアイヌ文化の調査・研究は「滅びゆく文化」の認識が前提になって行われ、その研究の成果は、博物館や大学の研究室に封じこめられがちでした。私自身の調査・研究を振り返ってみても“伝統的な歌や踊りを知っているお年寄りが亡くなっていく、いま記録しておかなければ”という焦燥感にかられて追い立てられるように仕事をしていて、その記録や研究成果が本来の意味をもってどう活かされるべきかという意識は希薄でした。今このことに強い反省が迫られていますし、また状況も大きく変わっています。アイヌ民族文化は「滅びゆく文化」ではなく、どのような形にせよ「生き続ける文化」であらねばなりません。現在、決して易しくない状況の下で、「アイヌ語教室」や「アイヌ古式舞踊保存会」等、アイヌ文化が生き続けるための活動が

各地で、多様な形で展開していますが、この活動に加わってどういう貢献が出来るのか、そのことに努力するのが当研究センターの中心課題であると考えています。さらに言えば、アイヌ文化に関わるこれまでの、そしてこれから、全ての研究成果を「生き続ける」ための活動に結びつけるコーディネーター役を果たすことが出来ないかとも考えています。

そのために研究センター自体が、全ての研究者、研究機関と結び合えるような開放的性格をもつことが必要不可欠の条件であると自覚しております。ともあれ、一人でも多くの方がたに、特に伝承活動に直接、間接に参加されている方がたに気楽に入りしていただければありがたいと思います。

現在、当研究センターには、非常勤2名を含む8名の研究職員が在籍しています。この8名の職員がアイヌの言語、歴史、芸能、生活技術に関する現地調査、既存の映像、音声、文献等の資料の収集・整備、伝承者や研究機関への提供、文化講座の開催、広報誌の発行等の調査研究・情報収集提供・普及の事業に精力的に取り組んでおりますが、これだけ多岐にわたる活動が寧日ない精力的な活動で着々と成果を得ていることを誇りに思うとともに、研究条件の一層の充実に努めたいと考えています。

今後とも御支援をお願いいたします。

サンクトペテルブルグのアイヌ資料調査

諸外国に収蔵されているアイヌ関係資料については1983年からボン大学ヨーゼフ・クライナー教授を中心としてヨーロッパのものが、1990年から名古屋大学小谷凱宣教授を中心としてアメリカのものが調査され、内容が明らかになりつつある。ロシアに関しても、その存在（約4,800点と言っていた）は知られていたが内容は未調査であった。



ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館

写真提供：内田祐一氏

今回(1995.7.30～9.3の5週間)、千葉大学の荻原眞子教授を研究代表者としてサンクトペテルブルグにあるロシア科学アカデミー人類学民族学博物館(頭文字をとってMAEと呼ばれる)に収蔵されているアイヌ関係資料の調査が行われ、約1,150点の(残りの資料は1996年に調査予定)資料を確認することができた。日本からの調査参加者は荻原眞子教授のほか佐々木利和氏(東京国立博物館)中川裕氏(千葉大学)長谷部一弘氏(函館市立博物館)出利葉浩司氏(北海道立開拓記念館)内田祐一(帯広百年記念館)と古原の7名である。

また、期間中に同じくサンクトペテルブルグ市にあるロシア民族学博物館(頭文字からREMと呼ばれ

るが、以前はGMEと呼ばれた博物館である)にもワシリエフスキーが収集した約2,500点以上のアイヌ資料があることを確認することもできた。

サンクトペテルブルグにあるアイヌ資料に関する事前情報が少なく、事前の準備としての調査票やフィルムの数など、どの程度の内容でどれだけの用意をすればいいのかもわからず、国情を考えてフィルムや計測器具、筆記用具なども多めに持参することにした。

筆記方法も、見落としがあっても再調査が簡単にできる場所でないだけに、事前の打ち合わせは慎重にできるだけ多様な状況を想定して行った。

調査票はアメリカの調査で使用した方法を参考にフォーマットを決め、計測方法や写真撮影などの段取りも、各調査参加者の得意分野から役割分担を決め、さらには最終的な整理方法までと、細かなところまで打ち合わせて万全を期した。

収蔵されていたアイヌ資料は、収集者別の24のコレクションからなり、ほぼ全ての資料で欧米の資料と同様に年代・地域が明らかになる情報が残されているなど、日本国内にはない貴重なものであることが判明した。

資料の年代は（コレクションによっては収集年・収蔵年・登録年のいずれかしか分からぬ場合もある）最も古いもので1826年（文政9）登録（海軍省が千島で収集したもので登録とあるので、収集年代はさらに以前）で、ついで1840年代に収蔵（ヴォズネンスキイの千島での収集、これも収蔵であるから収集は以前）した資料である。最も新しいものは1947年にサハリンで収集されたものであった。最も大きなコレクションは日本でも蠟管レコードで知られるピウスツキの収集した資料で6つのコレクションとして登録されており、台帳では約1,000点であった。全ての資料を今回だけの調査で終了することは日程的に無理だったので主としてこのピウスツキの資料を中心に調査を行った。ピウスツキの収集した資料は1903年から1906年にかけて登録されており、サハリンのホルムスク（旧真岡）と北海道の白老（特にシキウ）で収集されたものが主である。内容は日常生活道具にはじまり、イナウ（資料として収集しているため“魂”を入れてない）などの信仰用具、呪い具、狩猟具、玩具、数多くの模型（舟や家、祭壇など実物を搬送できなかったものから、台帳には玩具と記載された狩猟具など）など多岐にわたっている。また、台帳にも資料にもアイヌ語がかなり記録されており、そのアイヌ語から部分名称や使用方法などが明らかになったものも多かった。ただ残念なことに、ピウスツキ自身が書き残したメモ等の資料は調査することができなかった。資料自体は保存状態がよく、全ての資料を実際に手を触れて、細かいところまで観察し記録することができた。その結果、資料約1,150点を875枚の調査票に記録し、144本（36枚撮）約5,200コマの写真を撮影した。（古原）

シウリとシウニ

話は一月のある日の朝、一件の問い合わせから始まる。問い合わせの内容は「シウリザクラの名前の由来について、シウリザクラの“シウリ”的部分がアイヌ語のシウ・ニ（苦い・木）やシュニに由来すると書かれた文献を参考にして良いか」というものである。

早速、手元の辞書で「シウリ」や「シウリザクラ」の項目を開いてみた。知里真志保の『分類アイヌ語辞典 植物編』では、「シウリザクラ」の学名に対して "siwri「志ウリ」[< siw (苦い) ni (木)?]" とあった。私はここで「苦い木といえば、ニガキなる木があったよな。あれも確かに苦いはずだけど、あれのアイヌ語名もこれに似ていたような…」と考えついたのであるが、「とにかく今は、シウリザクラについてだけ答えればいい。」と思い、「ニガキ」についての疑問は解決せずに、ここまで問い合わせに返答してしまったのである。

その日の午後、『分類アイヌ語辞典』をもう一度開き「ニガキ」の項目を見るように言われた。そこには、 "siwni「志ウニ」[siw (苦い) ni (木)]" と書かれ、「シウリ」の語源分析からクエスチョンマークがはずされた形で説明がされていた。

アイヌは植物名に限らず、その物の特徴をとらえて名前をつけることが多く、同じような特徴を持つ物は共通の名前がつく場合がある。今回のケースにおいても、「シウリザクラ」が本当に苦いのか確認はしていないが、これと同じようなことがいえると考える。

とにかく「一つの質問」に「一つの答え」を出せばよいという考え方で、今回のミスを引き起こす要因があったわけで、今後の自分自身の意識を見直す良い経験となった。 （貝澤）

ケラアン

〈keraan おいしい〉

今年の2月21日、門別町に在住する人のお宅でお昼ご飯をごちそうになった。聞き取りの休憩中や食事の際、普通は録音を止めている。しかし、大事な話というのは、そんなときに飛び出すことが多い。

食事の誘いがある時、それは「帰り時の合図」とれる場合もあるが、この日のおばさん（普段の筆者の呼びかけ）は強くすすめる。遠慮がすぎると、かえって失礼になることもある。すぐ返答せずにいると、「たくさん作ってあるから、食べなさい」と言われる。しかし、一人暮らしのおばさんが自分の食べるつもりであった分を私に食べさせようとしているかもしれないなどと想像してしまい、素直にしたがってよいものかどうか判断に時間がかかった。「グズグズしていると男らしくないと思われているんじゃなかろうか」などと、考えれば考えるほどに私は迷った。私のはっきりとした返答を待たずに鍋はガスコンロにかけられた。結局、ふたを取っただけで漂う香りの誘惑に負ってしまった。「少しでいいよ」と言ったのに、たっぷりよそってくれるご飯。具がたっぷり乗っているうどんに嬉しい気持ちがわいてくる。食べ終わる頃、「本当においしい」というつもりで「ソンノ ケラアン」とアイヌ語で感謝を表した。すると、「違う。ここら辺は、エアラキンネ ケラアンって言うんだ」と言われるでないか。「本当に」という意味のアイヌ語の副詞は「ソンノ」「シノ」「エアラキンネ」などあるが、すべて同じような意味だと思いこんでいた。「シノ」よりは「ソンノ」の方が口語的な表現だとは感じていたが、「エアラキンネ」と「ソンノ」については、日常生活の中で、どう区別して使い分けたらよいのかわからんでいた。この土地に「ソンノ」という言葉がないわけではない。ただ、「本当においしい」と言うときにふさわ

しくない表現だとおばさんは言うのだ。この日は、明確な答えを得られず帰ることになった。

その三日後、千歳市に在住する中本ムツ子さんと一緒にお昼ご飯をいたたく機会があった。カムイユカラ（神譜）の語り手としては、とても若い世代の女性であり、私の大先輩でもある。最近刊行されたアイヌ語テープ付のアイヌ語絵本『カムイユカラ』六話中の三話を語っておられる。私は「アイヌ語の後輩」として、門別町での一件について質問した。中本さんは、自分の生活体験の中で覚えておられる言葉の微妙なニュアンスをわかりやすく教えてくれる人である。

「最初においしいと言う人がアリキンネ ケラアン（本当に・おいしい）と言って、ほかの人がソンノ（本当に）と答えるのよ。」「ソンノ ケラアンでもいいのかい？」「いいんだよ」ということで、二人でラーメンをすすりながら実演もして体得させてくれた。なるほど、あいづちを打つ方が「ソンノ」を使うのか。門別町で私が言った「本当においしい」と言ったつもりのアイヌ語は、誰かが「おいしい」と言ったときに発する同意の表現だったから、あの時におばさんはとても違和感を持たれたんだろうと思う。またひとつ、勉強したことをおばさんに報告することができる。3月上旬に会う約束をするため電話した際、今度は私がお昼をごちそうしようとしていたのだが、おばさんは「おにぎり作って待っている」と言われる。その時に、言うべき言葉は間違わない。

（大谷）

* 「本当に」という副詞は、千歳市で、*arkinne*「アラキンネ」、*arikinne*「アリキンネ」、*earikinne*「エアリキンネ」などと言う（中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』参照）。門別町では、*earkinne*「エアラキンネ」と言っている。

今年度のセンター刊行物について

当センターでは、この『センターだより』4号とほぼ同時に次の3冊を刊行いたします。

・『ポン カンピソシ1 (イタク・はなす)』

前号の『センターだより』でお知らせしたアイヌ文化紹介パンフレットの第1冊目です。

アイヌ文化を理解するうえでアイヌ語の基礎的な知識は欠かせません。そこで、アイヌ語の文法の簡単な概説、単語や日常会話の紹介のほか、アイヌ語の歴史と現状、口頭文芸、アイヌ語地名のあらましの説明などを盛り込みました。

また要点部分には英訳を付けてあります。

・『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』

第2号

当センターを中心とした調査研究活動の成果を公刊するべく、今年度も研究紀要を刊行いたします。今回刊行する第2号では、論文、調査報告、資料紹介あわせて8編を掲載いたします。

目次は以下のとおりです。巻頭の2論文で小特集的ななかたちを作つたことが特徴です。

◇論文 言語地理学によるアイヌ語の史的研究

中川 裕

◇論文 歴史研究の資料としてのアイヌ口頭文芸

奥田統己

◇資料紹介 「オンネパシクル」のアイヌ語原文資料

大谷洋一

◇調査報告 にわとり神の自叙伝

澤井春美

◇調査報告 沙流川中流域における、イナウに使用する樹木に関する報告（その1）

貝澤太一

◇論文 「北海道旧土人保護法」「旧土人児童教育規程」下のアイヌ教員

小川正人

◇研究ノート 学校教育における「アイヌ文化」の

教材化の問題点について

米田優子

◇論文 エムシについて

古原敏弘

・『北海道立アイヌ民族文化研究センター資料目録』

1 山田秀三文庫 図書目録

当センターが山田秀三文庫の寄贈を受け、昨年度から整理作業を行ってきたことについては、この『センターだより』誌上でお知らせして参りましたが、このたび、その中から先ず図書目録を刊行いたします。山田秀三文庫の中で図書資料として分類・整理した約5,500点について、おおまかな内容ごとの分類に従って配列し、書誌事項や図書の状態などのデータと書名索引、および文庫の特徴や整理の経過に関する解説を付けています。

山田秀三文庫には、このほか音声・映像資料、写真資料、地図・文書資料などがあり、整理作業の進捗に合わせて逐次目録を刊行して参ります。

当センターではこれから、アイヌ文化の調査研究・伝承普及の基礎的な貢献となるよう、所蔵する資料や調査した資料について、必要な整理を行つたうえで目録やデータベースを作成していく所存です。

なお、『山田秀三文庫目録』と『研究紀要』は從来と同様に道の行政情報センターにて有償領布する予定です。



1995年度後期の動き

9月

- 共同研究「在ペテルスブルク博物館アイヌ資料の民族学的研究」(参加：古原)

10月

- 『センターだより第3号』発行
- 教育史学会第39回大会（発表参加：小川）
- 第3回特別展「アイヌ舞踊その心と形」(平取町立アイヌ文化博物館主催、講師：甲地)
- 日本民俗音楽学会第9回大会（発表参加：甲地）
- 深澤信夫所長退任（10月31日付）

11月

- 谷本一之所長着任（11月1日付）
- 共同研究「アイヌ文化の形成と変容」第2回研究会（参加：古原）
- 「消滅の危機に瀕した言語に関する国際シンポジウム」(東京大学文学部、報告：澤井、奥田)
- 平成7年度第2回センター運営協議会

12月

- 共同研究「欧米アイヌ・コレクションの比較研究」(参加：大谷)
- 第6回アイヌ文化教室「子どもの遊び唄について」(アイヌ民族博物館主催、講師：大谷)

1月

- 「第8回アイヌ民族文化祭」(北海道ウタリ協会主催、解説員・記録係を派遣)
- 江別アイヌ史学習会(北海道ウタリ協会江別支部主催、報告：小川)

2月

- シンポジウム「21世紀へ向けたへき地教育の新た

な展開 その1」(北海道教育大学岩見沢校主催、発表参加：小川、米田)

3月

- 二風谷アイヌ文化博物館シンポジウム1996「踊りと歌、そして語りの芸能」(平取町立二風谷アイヌ文化博物館主催、講師：谷本)
- 平成7年度第3回センター運営協議会
- 『研究紀要 第2号』発行
- 『山田秀三文庫文献目録』発行
- 『アイヌ文化紹介小冊子 第1集』発行
- 『センターだより 第4号』発行

編集後記

◆最近は、アイヌ文化に関するイベントが全国各地で頻繁に開催されています。アイヌ文化に対しての関心の高さは、そこからも読みとれます。どこで誰が何を行ったかということを記録・保存しておくことは、その時代の動きを知るための大変な情報源になります。新聞記事ばかりでなく、レジメやチラシの収集・整理・保存の作業はとても重要です。収集できずに取りこぼすことのないよう、まだまだ“アンテナ”を広げていきます。イベントなどを主催する団体や参加した方がたからの情報提供があるとたいへんありがとうございます。

◆アイヌ文化伝承や研究の基礎となる調査・整理作業など、多くの方がたのご協力に感謝いたします。新しい年度もどうぞよろしくお願ひいたします。

編集・発行 北海道立アイヌ民族文化研究センター
〒060 北海道札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・75F

Tel. 011-272-8801(代) Fax. 011-272-8850

開館/月～金 9:00～17:00 休館/土・日・祝